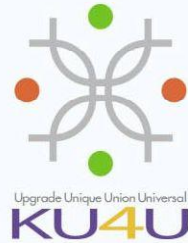


熊大通信

特集

熊本城が見た「激動のとき」





熊本大学の約束(KU4U) Kumamoto University For You

私たちは、熊本大学を開かれた心地よい環境の大学として、次の4つのことに全力を投入します。

Upgrade
未来を生き抜くプロフェッショナルの養成

Unique
新たな知的価値の創造

Union
地域連携と社会貢献

Universal
留学生教育と国際貢献

CONTENTS

- 1 知と社会 Vol.19
5 熊本城が見た「激動のとき」
- 6 夢の実現 Act.7
7 多くの人を救う
新薬の研究開発
熊本大学大学院医学薬学研究部 教授 水島 徹
創薬科学講座薬学微生物学分野
- 8 熊大群像
9 日本建築の伝統を守る
—時代の空気を伝えたい—
熊本大学工学部教授(環境システム工学科) 北野 隆
- 10 卒業生を訪ねて
11 日常と非日常のつながり
それが不変のテーマ
第17回小説すばる新人賞受賞作家 三崎亜記さん
- 12 国際交流
シリーズ 国際交流 ~熊本大学上海フォーラム2005~
15 初の海外フォーラムが強めた
中国との協力関係
- 16 熊大INFORMATION
お薦めの一冊 熊本大学理学部教授 西山忠男
17 熊本新哲学の道 熊本大学工学部助教授 緒方成一



表紙/動き出した芽達
(リトグラフ285×195mm)2000
作/川田 なな
作者プロフィール/(1975-2001年)
熊本県天水町(現玉名市)生まれ。
大胆なデフォルメと繊細な色使いが魅力の画家。学生時代に全国大学版画展で優秀賞を受賞するなど、将来を囑望されていました。本人が好きだった実家のみかん山に「なな、みかんギャラリー」がオープン。



熊本大学長
崎元 達郎

新年あけましておめでとうございます。

人事院勧告に連動した給与ダウンや実質的に毎年1%削減される厳しい大学予算状況の中、本学では、国際水準の教育による人材育成と、高度な学術研究、産学連携等を通じた地域貢献、先端医療、高度地域医療を実施しており、地域

新年のご挨拶

に根ざしつつ、国際的にも存在感を示す大学としてさらなる発展を遂げるべく全構成員が一致協力して努力しております。

その成果の一端を報告しますと、教育関係では、工学部による「まちなか工房」の開所と「ものづくり創造融合工学教育事業」の推進、自然科学研究科の「国際化推進プログラム」の実施、教育学部の「教員養成推進プログラム」の実施、薬学教育部の「DSSスペシャリ

スト養成(大学院教育イニシアティブ)の取組みなどが挙げられます。また、全学的には、本学独自の予算で学生が海外で活動する為の国際奨学金制度を設立しました。

研究関係では、ナノスペース電気化学や感染症のプロジェクトのスタートと、富士電機システムズ(株)との包括的連携(財化血研からの寄附講座の受入れ、「政策創造研究センター」の開所、本渡市(新・天草市)との包括的連携、バイオエレクトロクスに関する国際コンソーシアム協定締結、上海フォーラムの開催と熊本大学上海オフィスの開設などが挙げられ

ます。

施設整備では、10月の発生理学研究センター新棟の完成につづき、この3月に、情報ネットワーク館と放送大学熊本学習センター合築の完成、この秋には、附属病院の中央診療棟が完成予定です。

今後の展開としては、この4月から社会文化科学研究科における「教授システム学」専攻(修士課程)の設置、薬学部の薬学科(6年制)と創薬・生命薬科学科(4年制)への改組、阿蘇製薬(株)、ニプロ(株)、(株)LITバイオファーマからの寄附講座の受入れと創薬研究センターの設置、工学部の5学科から7学科への改

組、大学院自然科学研究科の専攻増と重点化等を実現します。平成18年度は、6年間の目標計画期間の中盤に入り、大学改革の真価が問われる年となります。熊本大学の更なる飛躍のためには、教職大学院の設置計画と社会文化科学研究科を修士課程と博士課程を持つ大学院として充実させる再編統合計画等を実現する必要がありますと考えています。

年頭にあたり、2005年の輝かしい成果を踏まえて、2006年が更なる充実・発展の年となるよう学内外の関係各位の御理解と御支援を心からお願い申し上げます。

熊本城が見た「激動のとき」

— 西南戦争前後の熊本から —

嘉永6(1853)年、ペリー率いる米艦隊が浦賀に姿を見せてから10余年。日本は開国から倒幕、そして明治維新と激しい変革の時を迎え、西欧列強と伍すべく近代化を急いだ。そんなさ中の明治10(1877)年、ここ熊本を舞台に起きた最後の内乱、西南戦争。征韓論に破れて野に下った西郷隆盛をリーダーに、明治新政府の方針に不満を抱いた薩摩藩の士族たちが起こした反乱だ。しかし、明治政府の鎮西鎮台(後熊本鎮台第六師団)が置かれた熊本城は、戦国武将・加藤清正によって築城された難攻不落の名城。放火とも失火とも言われる火災により天守閣を焼失したものの、薩軍の攻撃に耐え、官軍の反撃にあつた薩軍は敗退。これにより、明治政府への求心力はさらに強まり、その後日本の近代化は大きく進んだ。日本の近代化にとって、西南戦争はまさに「天分け目の決戦」だった。

今回は、幕末から西南戦争、そして夏目漱石やラフカディオ・ハーンが活躍したころの熊本に焦点をあて、熊本が日本の近代化にどう関わってきたのかを探ってみた。



西南戦争で焼失する前の熊本城大小天守閣

新時代を予感し、維新を演出した「シナリオライター」横井小楠

明治維新の前夜、肥後細川藩には、維新の英雄として名高い坂本竜馬や吉田松陰らが一目置く思想家がいた。経世済民、治国安民の策を説いた実学の祖、横井小楠である。

小楠は藩校「時習館」の秀才だったが、学問を続けるうちに、字義の解釈や暗記中心の朱子学よりも、現実の政治や経済に活かす実践的な学問の必要性を痛感して実学を提唱。それとともに、攘夷から開国へと考えを転じ、勝海舟らと並ぶ開明思想家として知られるようになった。

しかし、当時の肥後藩は守旧派の学政党が実権を握り、小楠の学政党は小楠自身を中心とする下士・豪農層の豪農派と、藩士派、中間派に分裂、藩内では不遇だった。

そんな中、安政5(1858)年、越前藩主・松平春嶽に政治顧問として迎えられた小楠は、同藩の改革を進め、さらに春嶽が幕府の政治総裁職となると、今度はそのブレーンとして幕政にも影響を及ぼした。

文久元(1861)年、小楠に会った勝海舟は、「今までに天下で恐ろしいものを二人見た。それは横井小楠と西郷南洲(隆盛)だ」「横井の思想を西郷の手で行われたらそれまでだ」と語ったと伝えられる。

明治元(1868)年、小楠は乞われて明治新政府の参与となったが、翌明治2(1869)年1月5日、病み上がりの身体をおして京都御所に出仕した帰り、攘夷派の元志士によって暗殺された。しかし、小楠が幕政改革を論じた「国是七条」にある「大いに議論の道を開き、天下とともに公共の政を為せ」は明治新政府の「五箇条の誓文」に活かされたほか、地租改正や富国強兵策など、明治新政府施策の根底には小楠の考えがベース



横井小楠肖像画
(熊本市文化財課蔵)

にあった。今日、小楠が維新の「シナリオライター」にも喩えられるのはそのためである。

熊本の「明治維新」

維新直後、熊本藩の立場は危うかった。親幕府的な学政党が長く主導していたため、刻々と変化する政治情勢に柔軟に対応することができず、新政府側からの不信感は強まるばかり。政府要人や外国人への襲撃を繰り返していた攘夷論者との関係を疑われて苦境に立たされ、東京では藩領地4分の1を減らすべきだとする噂さえ飛び交うようになっていた。

こうした事態に危機感を募らせたのが、小楠の思想を受け継ぐ学政党豪農派で、明治3(1870)年に知藩事になった細川護久である。護久は知藩事就任と同時に、新政府の地方官として各地に散らばっていた実学党の有能な人材を次々に熊本に呼びもどし、ここに実学党を中核とする改革政権が誕

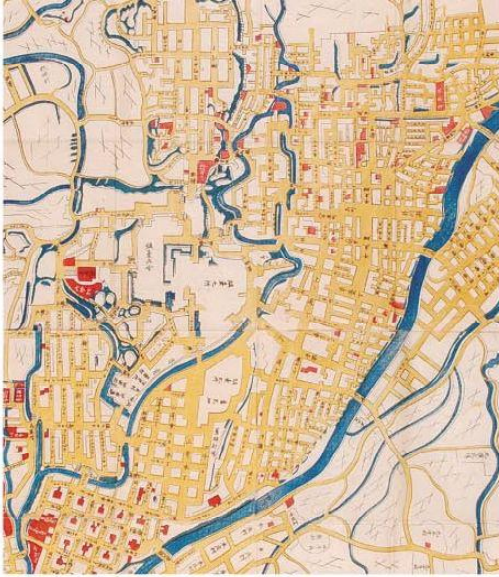
生した。

「世の中が変わった」 「明治3年藩政改革」

藩政を掌握した実学党は、11項目の改革プランを掲げ、次々に実行していった。中でも、約9万石の雑税免除は、藩内の多くの民衆が歓喜の声をあげた。また、小楠の甥・横井太平の進言によって設立した熊本洋学校や古城医学校は、熊本文明開化に大きな役割を果たした。

他方、実行されなかったプランの1つが熊本城の破壊。これに関して、熊本大学文学部の三澤純助教授は、熊本民衆がどのように明治維新を感じていたかを語る。

「諸事情から、結局城は壊されなかつたんですが、護久らは『戦国の余物』として、本気で城を壊すことを考えていました。それで、新政府へ廃棄申請書を提出した後、どうせ壊すならばと、天守閣を民衆に開放。あちこちから民衆が『お城見物』に集まりました。現在の菊水町に住んでいた五野栄八という人物はこのとき、天守閣から町を一望。その感想を日記に『是も時節到来(世の中が変わつたな)』と記しています。栄八のこ



明治初期の熊本の絵地図=部分=(永青文庫蔵、熊本大学附属図書館寄託)



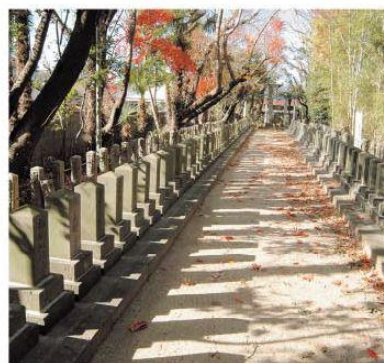
三澤 純 熊本大学文学部助教授

の素朴な感動こそ、熊本は明治の幕開けを物語っており、一般庶民も新時代の足音を肌で感じていたといえるでしょう」。

武士のプライドをかけた神風連の乱

明治4（1871）年7月、廃藩置県。三澤助教授は「肥後は明治維新に乗り遅れたとも言われていますが、版籍奉還を先行した薩長土肥（薩摩・長州・土佐・肥前）に次いで、廃藩置県を具申した阿因尾肥（阿波・因幡・尾張・肥後）の一翼を担っていた。その証拠に、天皇が廃藩置県を言い渡す際、まず薩長土肥の藩主に達しがあり、次に阿因尾肥の藩主が特別に呼ばれています」。

同年8月、全国に4つの鎮台が置かれ、熊本には中国・四国・九州地方を管轄する鎮西鎮台が置かれた。明治6（1873）年、権令（後に県令）として安岡良亮が着任すると、藩政改革を行った実学党は



神風連の乱で散った太田黒伴雄たちの墓

その革新性故に一掃され、代わりに学校党のほか、国学古典の見地から尊皇攘夷を主張していた勤王党が重んじられた。

勤王党一派である神風連は「神事は本也、現事は末也」を信条とした林檎園の教えを基に結束。明治9（1876）年の帯刀禁止令・散髪令に衝撃を受け、急激な欧米化に反対して、拳兵（神風連の乱）、県と鎮台の要人を襲撃した。

この乱はすぐに鎮圧されたが、戦死28名、自刃86名、その他処罰者など80名以上が犠牲となった。

後年、神風連の志士たちの日本の伝統に寄せる純粹な心に深く共感した三島由紀夫は『豊饒の海―奔馬』を執筆。その後、自衛隊に決起を促すクーデターを起こした

が失敗、壮絶な剖腹自殺を遂げた。この明治9年は、洋学校生を中心とする熊本バンドが結成されるなど、熊本においても欧米化を推進させる考え方と日本の伝統的な生き方にこだわる考えが入り乱れ

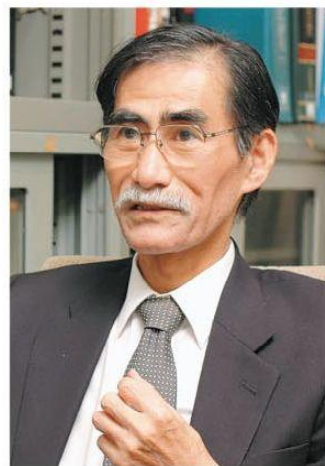
ていた時代であった。

国のあり方を問う最後の内戦 西南戦争

神風連の乱の余波も覚めやらぬ翌明治10（1877）年2月15日、50年ぶりの大雪の中、西郷隆盛率いる鹿児島県士族約1万3千人が鹿児島を出発して北上。以降、熊本を主舞台に、薩軍と官軍との間で死闘が繰り広げられた。

「西郷起つ」の報に、同年2月18日、熊本県は揭示板に触れ書きを出し民衆を立ち退かせた。翌19日熊本城が燃え、その後、坪井川方向が延焼。続いて市中が燃えた。薩軍を迎え撃つために官軍がとつた焦土作戦だった。

三澤助教授は「熊本城の天守閣炎上には、薩軍による放火説、官軍による自焼説や失火説など諸説が入り乱れている状態です。最も支持が多いのは、徴兵されたばかりで、実戦に慣れておらず、怯えきっていた鎮台兵を背水の陣に追い込むために官軍幹部が自焼したという説ですが、その時、長期の籠城に備えて蓄えてあった米や薪・炭等も一緒に焼けてしまっていて、その後の極端な食糧難の原因になっている。戦略で焼くなら、これ



富田 紘一 熊本市文化財専門相談員

らは運び出すのが普通の感覚だと思ふんです。とにかく新史料の搜索も含めて、今後の検討が待たれるところです」と語る。

熊本城炎上の原因は諸説があるが、この時城内のどこが焼失したのかについては、かなり明瞭になつてきている。明治初めの著名な写真家・富重利平らが撮影した古写真が数多く残っているからだ。熊本市文化財専門相談員の富田紘一氏は「なぜ、熊本に明治初期の写真が多いのか。その理由の一つは熊本が九州の政治・経済・軍事の中心だったから。もう一つは、皮肉にも熊本が西南戦争の戦場となつたからです。戦争の記録写真のおかげで、今私たちは写真からいろいろな情報を得ることができるといえます」。

富田氏は、天守閣が写っている写真と、天守閣がなくなっている写真などを詳細に比べ、これを基に行つた城内の発掘調査の結果、西南戦争の前後でどの部分を焼失したのかを明らかにしている。

近代国家誕生へ向けた最後の産みの苦しみ

薩軍には、熊本の士族たちも、実学党を除くほとんどの党派から熊本隊などを編成して参加した。

この時、加藤清正が島津の動きをにらんで築城した熊本城は、慶長12(1607)年の完成から27

0年の時を経て初めて「実戦の城」となった。しかし、つとに知られたその堅城ぶりは、薩軍による花岡山からの砲撃や籠城軍からの反撃に業を煮やした薩軍が坪井川を堰き止めて水攻めにしても落ちず、谷干城(たてき鎮台司令官率いる官軍の50日あまりにも及ぶ籠城を成功させた。西郷をもつてこの戦いは清

正に負けたと言わしめたゆえんである。

結局、薩軍は熊本城を落とせぬまま主力を北上。博多から南下してくる官軍を迎え撃ち、向坂、木葉の戦いを経て、3月4日から20日にかけて最大の激戦、田原坂の戦いへと突入した。

この戦いで、官軍が使った銃弾は1日平均32万発、大砲1千発以上。死傷者は両軍あわせて約6千5百名。空中で銃弾同士が

ぶつかり、くつついてしまったカチアイ玉が今も畑から見つかるなど、当時の戦闘のすさまじさをしのばせる。

最新のスナイドル銃をはじめ近代的な装備を持つ官軍に対し、薩軍は旧式の銃と不十分な補給体制であったため、伝統的な武士の戦である刀による斬り込みを得意とした。しかし、これに手を焼いた官軍は、急遽会津藩士を中心とする警視庁抜刀隊を編成して送り込み、戦いの形勢を逆転させた。

哀調を帯びたメロディーに乗せて、「雨は降る降るじんばはぬれる越すに越されぬ田原坂 右手に血刀 左手に手綱 馬上豊かな美少年」と歌う民謡・田原坂は、西南戦争で散った若者たちを象徴したものだ。3月20日早朝から始まった官軍の総攻撃により薩軍は敗走。ここに、日本近代戦史に残る大激戦は終息、この後薩軍は九州各県を転戦、9月24日鹿児島城山にて全滅。西郷も自刃し、近代日本最後

で最大の内乱は幕を閉じた。この西南戦争の惨劇を目にした佐野常民は「博愛社」を創設。これが日本赤十字社の前身であり、熊本は日赤発祥の地としても知られることとなる。

なお、西南戦争で軍旗を奪われ



西南戦争を題材にした錦絵

た官軍歩兵14連隊長乃木希典は、このとき自害しようとして止められ、後に日露戦争の雄として活躍。植木町の田原坂資料館や熊本城天守閣には、西南戦争当時の資料が数多く展示され、当時の様子を

知ることができる。

花岡山から撮影された西南戦争前の熊本市街地



良風みなぎる『学都』熊本

西南戦争から10年も経たない明治19（1886）年、高等中学校が全国5区に一枚ずつ設置されることになり、第五区である九州地区では「大藩にして、しかも良風漲みなぎる熊本の地が、地理的・歴史的条件にかなう」との森文部大臣の意向で、熊本に第五高等中学校の設置が決まった。

明治20（1887）年、かつての洋学校・医学校を仮校舎に五高の歴史はスタート。明治23（1890）年、黒髪村の広大なキャンパスに新築移転した。この時建てられた重厚な赤煉瓦の洋風建物は五高記念館として、現在も熊本大学構内で当時のまま見ることが出来る。



熊本大学構内にある五高記念館
開館：土・日曜、10:00～16:00（入場15:30まで）無料



伊藤重剛 熊本大学工学部教授

熊本大学工学部の伊藤重剛教授は「明治の洋風建築物の中でも格式高い造りです。当時、全国に五つの旧制高等学校がありました、今も教育施設として残っているのはここだけ。貴重な歴史的建物です」と話している。

五高の歴史を紐解くと、そこには、後世、日本社会に影響を与えるきら星のような人々が存在する。なかでも特筆すべきは、英語教師として教鞭をふるったラフカディオ・ハーン（小泉八雲）と夏目漱石だ。ハーンは五高生を質実剛健の「九州魂」を持った「豪傑肌」と評し、講演の中で、「日本の将来を偉大にする所以は、九州魂、熊本魂を養うことにあり」と学生たちに語りかけた。

漱石も開校10周年記念式典での祝辞で、「教育の基本は師弟の和熟にあり」など珠玉の言葉を残しており、それらの文章などの膨大な史料も五高記念館で見ることができる。

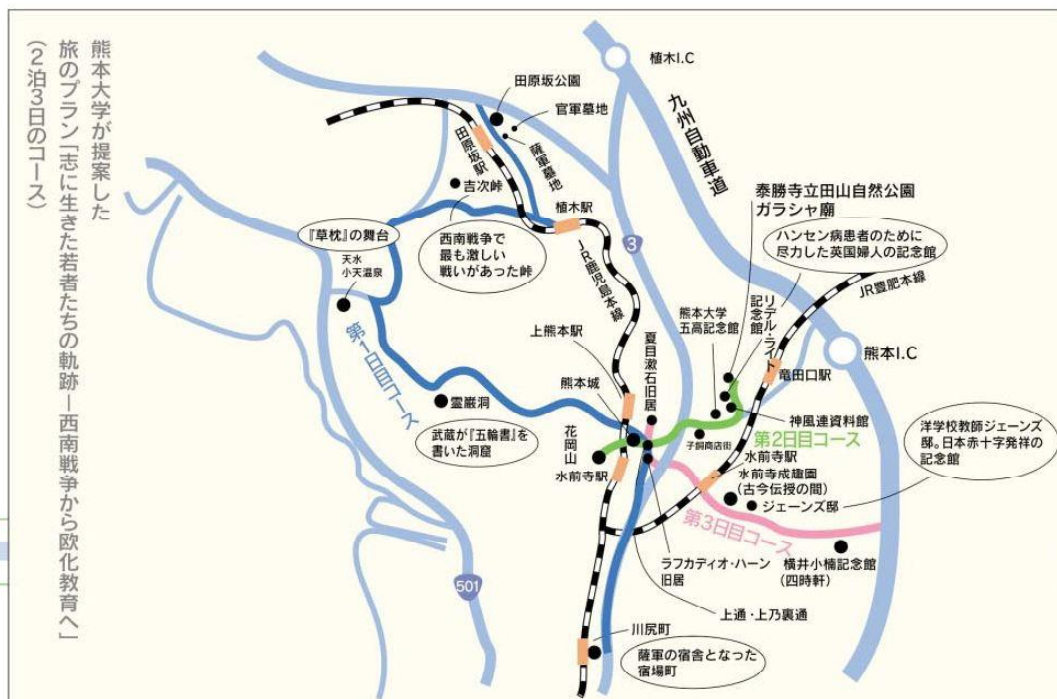
国づくりに燃えた時代の熱い息吹を伝えたい

明治29（1896）年、五高に赴任した漱石は「ああ、熊本は森の都だなあ」と感嘆した。しかし、緑豊かで平穏に見える熊本も、その奥底を覗いてみると、維新のシナリオライター、小楠を産む一方で西南戦争の舞台となり、激しい時代の波が渦巻いていたのである。多くの人が血気盛んに学び、この国の行く末を議論し、行動し、新しい時代を作ろうとした幕末から明治初期。この時代の熊本を知ることが、変革の時代を生きる現代の私たちへ大きな示唆を与えてくれるに違いない。

今年度、文化庁が募集した「わたしの旅」日本の歴史と文化をたずねて100選に、熊本大学政策創造研究センターの上野真也助教授が提案した旅のプラン「志に生きた若者たちの軌跡―西南戦争から欧化教育へ」が選ばれた。

「西南戦争は、日本近代化のターニングポイント。青年たちに、国づくりに燃えた時代の人々が抱いていたパッションを伝え、また団塊世代の夫婦、友人による歴史と日本文化・精神を再考する旅として提案しました」と上野助教授。

熊本城、田原坂、神風連資料館、五高記念館などを巡る「泊三日のコース」となっている。これを参考に熊本にある近代への緑の地を歩き、先人たちの情熱を肌で感じてみてはどうだろうか。



熊本大学大学院医学薬学研究部
創薬科学講座薬学微生物学分野 教授 水島 徹

多くの人を救う 新薬の研究開発

副作用は なぜ起きるのか

アスピリンなどの「NSAIDs」は、世界で最も多く使用されている解熱・鎮痛剤の一つですが、胃潰瘍の副作用があることで知られています。このため、胃潰瘍を起こさない「COX-2選択NSAIDs」がつくられました。が、今度はこの薬に心筋梗塞などの副作用があることが分かり、アメリカでは販売停止になっていきます。「NSAIDs」による胃潰瘍の副作用により、全米で年間約1万6500人が亡くなっているといわれ、その数はエイズによる死亡者数を上回っています。日本には正確なデータはありません。

が、日本でもかなりの人がこの副作用で亡くなっているのではなかないと推測されています」という水島教授。「病気のせいではなく、薬によって人が亡くなるのはおかしい」という思いが、「そもそも、NSAIDsは、なぜ胃潰瘍を起こすのか」という疑問へつながり、副作用を起こさぬ「NSAIDs」の研究開発に取り組む原動力となりました。

わずかな可能性を信じて 学界の「常識」に挑戦

研究の結果、水島教授は約2年前、NSAIDsには細胞を傷つけてしまう「細胞傷害性」があることを発見。

「細胞傷害性」がなく、なおかつ「COX-2選択性」な「NSAIDs」をつくればいいのではないかと考えるようになったのです。

しかし、水島教授のこの考えは、「副作用を起さぬNSAIDsの開発は不可能」と考えられてきた当時の常識を真っ向から否定するもので、常識に対する挑戦でした。

「教科書のセオリーは正しくないこともあるということですよ」と淡々と語る水島教授ですが、地道な研究を続けることにより、副作用を起こさぬ「NSAIDs」を作り出すスクリーニング（選別）方法を発見。特許を出願し、現在は薬の実用化を目指した研究開発を続けています。

父の病で奮起

水島教授の父・昭二さんは、東京大学名誉教授（生化学、分子生物学）で、世界的に名の知れた科学者でした。その影響もあり、子どもの頃から「がんに効く薬をつくりたい」と考えていた水島教授。

創薬は、新薬を開発することで世界中の人々を救うことができるスケールの大きな分野です。しかしその大きなハードルが、副作用。例えばよく使用されるアスピリンには胃潰瘍（かいよう）の副作用があるといわれます。今回は、副作用を起こさない非ステロイド性抗炎症薬「NSAIDs（エヌセイズ）」の研究開発に取り組んでいる大学院医学薬学研究部の水島徹教授を訪ねました。

創薬の意義を熱く語る水島教授。



PROFILE

水島徹 (みずしま・とる)

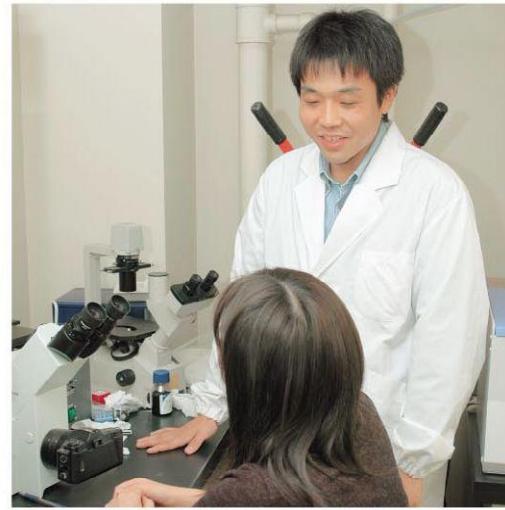
1967年生まれ。愛知県出身。東京大学薬学部卒業後、同大学院薬学系研究科修士課程修了。薬学博士。医薬品メーカーを退社後、九州大学薬学部微生物薬品化学教室助手、米国コールドスプリングハーバー研究所客員教授(兼任)などを経て、2004年から現職。2006年4月、「熊本大学薬学部附属創薬研究センター」初代センター長就任予定。



いつかは、偉大な父を超える研究者に…。水島教授は、尊敬する父・水島昭二博士(生化学、分子生物学)の遺影を研究室に掲げている。

しかし、長じてからは「偉大な父と同じ分野で頑張るのは何となく気恥ずかしい」と大学院を修了後、いったん医薬品メーカーに就職。その後、「もっと本質的な薬をつくりたい」と再び大学に戻りましたが、博士号取得にはこだわらず、九州大学でのんびりとマイペースな研究生生活を送っていました。

そんな水島教授に転機が訪れたのは1995年の夏。昭二さんに膝(すい)上げると、同年末に博士号を取得しました。権威ある科学雑誌に初めて論文が掲載された2ヶ月後、昭二さんは63歳で息を引き取りました。「父の他界後、人から聞いた話ですが、私がようやく一人前になったと、私の論文について話していたそうです。今の自分があるのは、やはり父の存在が大きいですね」と語る水島教授です。



学生と談笑する水島教授。「医者には目の前にいる一人の患者を救う。薬の開発は世界中の見知らぬ大勢の人を救うことができるんです」。

臓がんが見つかり、余命3、4ヶ月と宣告されたのです。

水島教授は苦悩の末、「父の存命中に、父に認められる一流の論文を書いて、博士号を取得することが最後の親孝行」と研究に専念。約130ページの論文を2日間で書き上げた。

大学発ベンチャーへ

「新薬の開発は、人の役に立つだけでなく、実質的なビジネスチャンスにもつながります。NSAIDs市場は、1兆5000億円とも言われ、私が副作用のないNSAIDsを開発できれば、年間8000億円の売り上げも期待できます」。研究者として、ビジネスにも大きな関心を持つ水島教授。独立行政法人科学技術振興機構が公募した、平成17年度の「独創的シーズ展開事業・大学発ベンチャー創出推進」というプロジェクトのライフサイエンス分野で、水島教授の「胃潰瘍も心筋梗塞も起こさない、第四世代NSAIDsの開発」が採択されました。

このプロジェクトは、大学の研究成果を基に、起業や事業展開に必要な研究開発を推進し、大学の研究成果を社会や経済へ還元することを目的としており、大学発ベンチャーの起業を目指す水島教授に、びつたり取り組み。「学生時代から経営に興味があり、世界一と言われる経営コンサルタント会社でアルバイトをしたことが今、役に立っています」。

創業に必要なのは
"夢"と"ロマン"と
"チャレンジ"と

平成18年4月には、全国初となる

創業分野の研究機関「熊本大学薬学部附属創薬研究センター」が新設。水島教授は、初代センター長に就任予定です。「創薬研究者を育成し、センターで新薬を開発、生産できるようにしなければいけません」。

薬学部というとまず薬剤師を思い浮かべるかもしれませんが、「創薬研究は、自分のアイデアと努力次第で、世界中の人々の命を救うことが可能。時代の最先端で活躍できる仕事で、興味があれば、ビジネスにもつながられる。創業に必要なのは、薬を作ることへの「夢」と「ロマン」と「チャレンジ」です」と、高校生へメッセージを送ります。今後は、NSAIDsだけでなく、がんやアルツハイマーなどのさまざまな新薬を開発したい、と水島教授。「創業は、日本を救う仕事だと思っています」。



昨年11月、熊本県庁で開かれた「創薬シンポジウム」で、水島教授は創薬研究の重要性とビジネスとしての可能性について講演、産学官の各分野からの注目を集めた。

熊大群像

熊本大学工学部教授 北野 隆

日本建築の伝統を守る

— 時代の空気を伝えたい —

熊本大学工学部の北野教授は、研究活動や大学での講義の合間をぬって、熊本県内はもちろんのこと、大分、宮崎など九州各地へ車を走らせます。日本の伝統的な建築物や町並みを守るため、さまざまな地域でボランティア活動が続けているのです。

頑固に守る日本の伝統建築

絵を描くことが好きで、学生のころには日本画を学び、院展での入選経験もあるという北野教授。工学部が人気を集めていた時代、工学部で絵の描ける場所、ということ、建築学を選択しました。「日本では建築は工学の分野に入られることが多いのですが、本来は芸術の分野です」。

江戸時代の建物をはじめとする伝統建築の研究を続けてきた北野教授。「日本建築の伝統的な文化を、伝統技術も含めて後世に伝えることが大きな目的です」。研究室を飛び出して、古い建物を残すためにボランティアの活動に取り組んでい

ています。建物の復元や修理をする際に直面するのが、昔のままの建物では不便だという地元の人たちの声です。しかし北野教授は、「昔どおりの建物を復元しないといけない」と強調します。エレベーターを作ったり、バリアフリーに変えたりすると、当時の雰囲気が変わってしまいます。「文化財というものは、妥協のもとにつくると、現代のものになってしまいます。頑固に当時の雰囲気を残していかなければならないのです」。住民と協力するだけでなく、時には反対しながらも、北野教授は伝統の建物を守ろうと努めているのです。

世界に通じる観光地を目指して

「近年のグローバル化の流れの中で、日本人も外国へ行くし、外国の人も日本に来ます。世界がひとつになればなるほど、その国の独自性やアイデンティティーを見たいのです」。日本人がギリシャでパルテノン神殿を、エジプトでピラミッドを見たいように、外国の人が見たいのは、日本的な空間や建築です。

「古いものを、たとえ不便でも当時のまま残すことで、かえって観光地になります」と北野教授は主張します。便利に早く安く、という時代にあつて、動かないですべ



PROFILE

北野 隆(きたの・たかし)
熊本大学工学部教授(環境システム工学科)。熊本大学五高記念館館長。熊本市出身。熊本大学工学部建築学科卒業。工学博士(東京工業大学)。日本建築学会正会員、熊本県建築審査会委員、熊本県文化財審議会委員、熊本市文化財審議会委員、国指定史跡人吉城整備委員会委員、他。



復元前



ダムに沈む予定の五木村の風景



復元後 熊本県人吉市の人吉城跡。ここも、北野教授のアドバイスにより、城郭内部の建物（写真上）を撤去し、昔のままの槽を復元した



おび 宮崎県飫肥市は、北野教授のアドバイスに従って城下町の町並みを復元。今では、観光客に人気のスポットになっている。

北野教授は大学での業務以外にいくつもの文化財審議会委員などを務め、大分の臼杵城、岡城、宮崎の飫肥(おび)の町、熊本では熊本城、鞠智城など、数多くの建築物の調査や整備に関わってきました。整備委員会委員として長らく携わってきた人吉城の復元は、2005年の12月に完成となりました。研究室の棚には、ファイルされた膨大な量の写真があります。復元や修復作業の前と後を必ず記録しなければ

共に旅した カメラが見たもの

て見ることができるようなもの、結局、立ち行かなくなってきた。 「わざわざ行く必要があるもの、2000年前のものなら2000年前の空気に触れられるから、みんなが行くのです。」 熊本城築城400年事業に関わる上でも、北野教授は同じ思いで取り組んでいます。「階段ばかりでバリアフリーにしなかった清正を恨んでください」と笑いながらも、清正の時代の空気に触れることのできるものを目指しています。



北野教授愛用のカメラ。カメラカバーに年季がうかがわれる。

ならないからです。ダムに沈む予定の五木の村や、整備されて消えてしまった古い町並みなど、今となっては失われてしまった当時の様子を伝える貴重な写真です。 北野教授と共に、九州や日本はもちろん、世界各地を旅したニコソンのカメラ。「エジプトのルクソールで落としたため少し傷が入りましたが、今も現役です」という年季の入ったカメラには、建築物を撮るために使用する特別なレンズが取り付けられています。もうすぐ定年を迎えるという北野教授の仕事を見つめ続けたこのカメラは、定年後もかえって忙しくなるのではないかと笑う北野教授と共に、これから先もさまざまな建物を写し続けていくことでしょう。

を訪ねて 第17回小説すばる新人賞受賞作家 三崎亜記さん

日常と非日常のつながり それが不変のテーマ

第17回小説すばる新人賞を受賞し、昨年刊行された三崎さんの『となり町戦争』。三崎さんが初めて書いたというこの長編小説は、発行部数15万部を突破しました。三崎さんが熊本大学の学生だった頃のお話や、『となり町戦争』執筆のきっかけ、そして、三崎さんが持つ不変のテーマについて伺いました。

学生時代にしか できないことをやる

私が熊大生だったとき、1・2年でほぼ単位を取り終えたこともあり、3年生になるととにかく時間がたっぷりあったことを覚えています。明け方まで起きていて翌日の夕方まで寝ていたり、夜中の3時頃にキャンパスを散歩したりしていましたね。教育研究会というサークルに入り、夏休みに子どもたちに授業をしたり、重度障害者の支援ボランティアなどもしていました。特に子どもが好きだとか、ボランティアをするべきだ、など確固たる意思があってやっていたわけではありません。ただ、例え

ばバイトなどに関しても、卒業すれば嫌でも働かないといけないわけだから、学生のうちは親に負担をかけすぎない限り、学生のうちにしか出来ないことをやろうという気持ちがありました。

その頃から「将来本を書きたい」と思っていました。それも、小学生が将来歌手になりたいという程度の気持ちだったと思います。就職して、作家になりたいと思いつつも、自分の能力が果たしてどの程度なのか、それを見極めるための「小説すばる新人賞」応募でした。一次審査を通れば自信につながるーと思っていたのが、新人賞を受賞。初めての出版を手がけてくれた出版社も、「作

家を育てる」というスタンスの会社だったことは、とてもありがたいことだと思っています。

なぜ書くのか

受賞後、「なぜ書くのですか」という質問をよく受けるのですが、実は答えるのがとても難しい質問です。作家になりたいと思いつつ、怠惰な生活を送っていた頃、よく夢を見ました。巨大なものに押しつぶされそうになる夢。びっしょりと汗をかいて飛び起きていました。書いてみるとその夢は見えない。その悪夢を見させる根底にあるものは何かわかりません。ただ、書く理由をあえてあ



PROFILE

三崎 亜記(みさき・あき)

福岡県生まれ。熊本大学文学部史学科卒業。福岡県内の地方公務員。



授賞式であいさつをする三崎氏

げれば、「書くしかないからだ」と思っています。

私を感じていないだけなのかもしれないませんが、賞を受けて周囲が変わったかという点、特に変化はありません。私は公務員ですが、「小説すばる新人賞」を受賞したあと、職場の上司が「サインしてくれ」と、「となり町戦争」の本を持ってきました。その本を何気なくパラパラとめくると、私が書いた行政側の行動や言葉に全部赤線が引いてありました。そ

れには、ちよつとドキツとしました(笑)。家では、兄が100冊程購入して職場の人たちに配ってくれたらしいですが、両親は本を読んで「よくわからない」と言っただけでした。

不変のテーマ

『となり町戦争』を書くきっかけになったのは、大学3年生のときに勃発した湾岸戦争でした。それまで原爆の悲惨さなど、いろいろな平和教

育を受けてきたはずなのに、「戦争が起こってしまったのは仕方がない」という考えに簡単に陥ってしまった自分に衝撃を受けたのです。第二次世界大戦の反省を教えられながら、どこかとらえきれない。湾岸戦争で、戦争という流れにたやすく乗ってしまった自分の意識に驚きました。それが、戦争というものが自分の中でクローズアップされた一つの出来事です。その後起こったのが米国の9・11テロ。このときには「衝撃を受けていない自分」に恐怖を感じました。その事実をたやすく飲み込み、慣れてしまうという意識が怖かった。そして、「自分たちの世代にとつての戦争」を書く必要があると思っただけです。

ただ、『となり町戦争』を反戦の書として扱って欲しくない。この本を読んで、「戦争は絶対悪だ」という人もいれば、「戦争は仕方ない」という人もいるでしょう。その考えは読者にゆだねたいと思います。ただ、世界のどこか遠くで起こっている戦争は「非現実的」で、個人個人が暮らしている現実とかい離していると思われがちですが、そうではない。日常と非日常は根底でつながっていることを、この本を通して伝えたいのです。そしてそれは、今後変わらない私のテーマと考えています。



『バスジャック』(集英社)
『となり町戦争』に続いて昨年11月末に刊行された三崎さん最新作の短編集。



『となり町戦争』(集英社)
第17回小説すばる新人賞を受賞した『となり町戦争』。ありふれた会社員生活を送る主人公は、ある日役場からの広報誌でとなり町との戦争が始まったことを知る。日常はなんら変わらないのに、広報誌で知らされる戦死者は日ごとに増え、自分も少しずつ戦争業務に巻き込まれていく主人公。それでも行政が遂行する戦争という「町の事業」に非現実感をめぐえぬ。しかし、唐突に始まった戦争が唐突に終わる時、主人公は「非現実」と「現実」の間に距離はないことを理解する。



初の海外フォーラムが強めた 中国との協力関係

シリーズ 国際交流 — 熊本大学上海フォーラム2005 —

熊本大学は10月27・28の2日間、中国・上海市で、学術交流イベント「熊本大学上海フォーラム2005」を開きました。海外では初めてのフォーラム開催となり、日中の大学関係者だけでなく、県内外の行政や企業からも多数が参加。日本と中国の協力、連携を推進する上で、大きな成果をあげました。

中国経済の中心 上海で情報発信

熊本大学は、「東京フォーラム」「関西フォーラム」につづく第3回目のフォーラムを、中国・上海市で開きました。熊本大学と中国の大学の研究者や学生、県内企業の関係者など約450人が参加。会場となったホテル花園飯店では、2日間にわたって講演会や学生による研究発表会、パネル展

示、共同研究や留学などの交流相談会が行われました。

上海は、今や中国経済のみならず世界経済の中心ともいえる巨大商業都市です。日本企業の進出もめざましく、2010年の万国博覧会に向け、さらなる発展が見込まれているところです。

日本と中国の大学間の交流を深め、産学官連携を推進する上でも、上海でのフォーラム開催は、非常に有意義なものとなりました。

日本中国の 産学官連携を推進

熊本という地域全体の発展は、地



約1700万人が住む中国第2の都市・上海。2010年の万博開催に向けて建設ラッシュが続いている。



熊本空港からチャーター便で、参加者約200人が上海へ飛び立った。

熊本大学上海 フォーラム2005 講演会プログラム

- 10月26日
熊本大学上海オフィス開所式
- 10月27～28日
熊本大学上海フォーラム2005
北京工業大学と部局間交流協定書調印式

日程

会期第1日目 10月27日(木)

基調講演

熊本大学における創造融合工学教育
—ものづくり教育による新しい工学の創生と先端研究への展開—
熊本大学工学部長 教授 谷口 功

招待講演

日本の留学生受入れ政策と日本の大学の中国進出
在中国日本大使館・広報文化センター
一等書記官 岩佐 敬昭

特別講演

ヘルスプロモーションに基づいた上海市龍華町における
健康なまちづくり共同プロジェクトのこころみ
熊本大学大学院医学薬学研究部 教授 上田 厚

招待講演

復旦大学先端フットニック材料デバイス拠点研究所における
ナノ構造材料デバイスの研究
復旦大学 教授 J.D.Wu 復旦大学 副教授 Ning Xu

招待講演

中国における大学間共同研究プロジェクトの進め方
清華大学 教授 孟 永鋼

招待講演

中国のエネルギーの現状と代替エネルギー—
燃料用エタノール生産技術および発展—
四川亜達高科技責任有限公司・四川大学 副教授 鐘 亞玲

拠点紹介

水環境汚染物質の動態評価研究拠点の構築
熊本大学理学部 教授 安部 眞一

拠点紹介

ナノスペース電気化学創製のための研究教育拠点
熊本大学工学部 教授 町田 正人

招待講演

上海交通大学国家金型CAD研究工程研究センターの
産学共同研究
上海交通大学 副教授 趙 震

会期第2日目 10月28日(金)

基調講演

熊本大学の産官学連携の現状と将来
熊本大学学長 崎元 達郎

招待講演

大学における産学共同研究推進戦略
上海交通大学 教授 阮 雪梅

特別講演

衝撃エネルギーが創る新しい産業応用—21世紀COE—
熊本大学21世紀COE拠点リーダー 教授 秋山 秀典

招待講演

SIBS(Shanghai Institute of Biological Sciences) Technology Transfer
—Improving Public Health Through Global Public Private Partnership—
中国科学院上海生命科学研究部 (SIBS) 副所長 Gan Rongxing

特別講演

Toward the Establishment of the Asian Mouse
Resource Association(AMRA)
熊本大学発生医学研究センター 教授 山村 研一

特別講演

中国、韓国を見据えた富士フィルムの熊本進出
富士フィルム九州株式会社 代表取締役社長 山口 光男

招待講演

中国における危険廃棄物処理の現状と国際協力の展望
The State of Dangerous Waste Disposal in China
and Prospects of International Cooperation
杭州大地環保有限公司 副總經理・総工程師 Dai Qi-Wen

特別講演

中国に於ける半導体産業の発展と(株)東京カソード
研究所の対中取引について
有限公司 東針電子(上海分公司) 支社総経 桑島 壮吉

特別講演

試薬開発と中国市場
(株)同仁化学研究所次長 満田 健一

招待講演

復旦大学における科学技術研究活動
復旦大学教授情報工学部長 Chen Liangyao

特別講演

21世紀COEプログラム「細胞系譜制御研究教育ユニットの構築」
熊本大学21世紀COE拠点リーダー・発生医学研究センター
教授 田賀 哲也

招待講演

Some International Joint Research Activities in
Photonics and Electromagnetics in Zhejiang University
浙江大学教授長江計画 教授 何 賽靈 (He Sailing)

招待講演

SUSTAINABLE CITIES IN CHINA : Challenges,
Approaches and Policies
同濟大学 教授 Zhu Dajian

域の中核大学である熊本大学にとつても、大変重要なことです。今回、熊本大学の呼びかけにより、県内外の70社、110人がフォーラムに参加し、企業の代表者による自社の活動

内容の紹介が、講演やパネル展示を通じて行われました。日本企業にとつて、今後、中国は大きな市場となることが見込まれています。現在は、「熊本」の名はあまり

知られていないというのが現状ですが、中国に近いという立地条件や豊富な人材を考えると、幅広い分野で、熊本と中国の交流は盛んになる可能性を秘めています。中国で、「熊本」の



産学官の関係者が多数参加したフォーラム



招待講演/上海交通大学 阮雪榆教授

中国の大学との 学術交流に期待

知名度を上げることは、フォーラムの大きな目的の一つでもあり、熊本大学の中国での情報発信・情報収集には、これから進出を検討している企業からも、期待が寄せられています。今回のフォーラムを機に、産学官の連携はさらに強まりました。

熊本大学は、既に、複数の中国の大学や研究機関と交流があり、共同研究などで、研究者間の結びつきもありました。中国からの留学生は、毎年150人以上に上ります。熊本大学を卒業した中国人留学生の多くが、現在、上海をはじめとする中国全土の大学や企業で活躍しています。上海フォーラムでは、熊本大学への留学経験のある研究者を含む中国人研究者や企業人による講演も行われました。また、参加大学の学生達も英語による発表を体験し、国際的感覚を身につける絶好の機会となりました。

10月28日には、熊本大学と北京工業大学との間で、学術・学生交流協定が結ばれました。交流協定締結式には、熊本大学から菅原勝彦大学院自然科学研究科長、谷口功工学部長、北京工業大学から張沢副

学長が出席し、協定書に署名しました。部局(工学部・大学院)間の交流を、将来は大学全体の交流に発展させることを目指しています。北京工業大学は中国有数の工業系総合大学です。中国の首都北京市に拠点を置く大学と学術交流協定を結ぶことは、熊本大学にとっても大きな意義を持ちます。今後は、工学分野を中心に研究者の交流や共同研究を推進し、学術交流や学生交流を活



交流協定調印後の
谷口功工学部長(左)、
張沢北京工業大学副
学長(中)、菅原勝彦
大学院自然科学研究
科長(右)



会場に設置された紹介パネル



発を行う予定です。
このような中国の大学との連携を強化することで、双方の大学の教育、研究レベルの向上が期待されます。



熊本大学上海オフィスオープン
テープカット(下)と看板設置の(左)の様子



中国の大学との共同研究・学生相互派遣等の交流相談会

継続的な中国との交流を 目指して

「上海フォーラム」の開催に先立ち、熊本大学初の海外事務所「上海オフィス」が開設されました。オフィスには現地スタッフが常駐し、情報発信や交流の拠点として活用されます。中国の大学との情報交換のほか、留学希望者向けのセミナーを開き、中国の学生へ情報を提供する予定です。また、中国の企業情報の収集や県内外の企業の情報提供など、日本の企業と中国の大学や企業との連携の橋渡しをすることも視野に入れています。

上海では、熊本大学初の海外支部として同窓会設立が準備されており、中国人留学生を含めた同窓会の上海支部として発展させていく予定です。今後、上海オフィスや同窓会を中心に、卒業した留学生や同窓生の交流の場が生まれることが期待されます。フォーラム最終日の交流会では、五高時代からの寮歌や中国の学生による民族楽器の演奏も披露され、大盛況のうちに終了しました。熊本大学は、引き続き、日本と中国との産学官連携を推進し、幅広い交流の促進を目指します。

熊本大学が交流協定を結んでいる 中国の大学等一覧

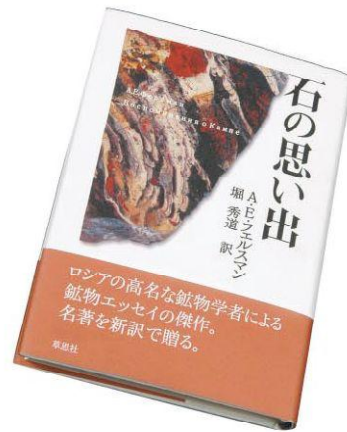
熊本大学	中国
大学間交流協定	広西師範大学
	同済大学
部局間交流協定	法学部 華東政法学院
	医学部 中国医学科学院
	薬学部 北京中医薬大学 中薬学院 南京中医学大学 薬学院
	医学薬学研究部 中国医科大学 哈爾濱医科大学
	工学部 中国科学院力学研究所 工学部・自然科学研究科 四川大学 理学部・工学部 山東大学工学系学院 桂林工学院 大連理工大学工学部・大学院自然科学研究科 北京工業大学
	生命資源研究・支援センター 北京大学 医学部実験動物科学部 中国科学院上海実験動物センター 広東省医学実験動物センター



理学部教授
西山 忠男

Vol.11
Book

お薦めの一冊



『石の思い出』

A.E.フェルスマン 著
堀 秀道 訳(草思社)

「石の思い出」はロシアの偉大な鉱物学者フェルスマンの随筆である。それははなはだ文学的で、透明なアクアマリンを透かし見るような世界である。中学生の時に読んで今日に至るまで忘れることができない一章を紹介しよう。「第五章 カラダーク火山で」がそれである。

地質学に興味を持つ大学生の主人公は、いまだ見たことのない火山に憧れ、クリミアのカラダーク火山へと向かう。彼は歴史学専攻の女子学生シューロチカに地質学の魅力を吹き込むことに成功し、連れ立って旅立った。長い旅の末に、神秘的な青い海辺、コクテペリに到着する。その右手にはカラダーク火山が聳えていた。二人は近くにテントを張り、毎日火山を眺めながら、渚で美しい小石を拾い集めたりして恋人同士のように戯れる。そしてある日、船を雇いセルドリコ入江に向かう。先人未踏の険しいギャウルバフ沢を二人で登りながら、絶壁に走る美しい口

ズ色のメノウ脈を発見する。シューロチカは狂喜してこのメノウ脈を打ち割る。美しい脈は姿を変えて次々に二人の前に現れ、シューロチカは断崖の上にいることも忘れて、石の虜になってしまう。「ほつら、割れ目の中にこんな赤い鉱物があるわ。緑玉髓の上に赤い結晶がついているのよ。先の方には真っ白い方解石の大きな結晶もあるわ。あら、脈だわ。上へ大きく伸びていて、すごいわ。」シューロチカは狂気じみた声でそう叫んだのだ。そして、ああ、それから先のことを主人公は思い出せない。三日後にシューロチカの体はセルドリコ入江の美しい礫の上で発見される。

悲しい物語である。しかしおおよそ石を愛する人間でシューロチカの場合に共感しない者があるだろうか。シューロチカの運命はいつか自分の運命になるかもしれない。中学生の私はそう思い、今でもそう思い続けている。この本を愛してやまない所以である。

熊本 新哲学の道

◆熊本市中心部から西方、金峰山に向けて車を走らせる。車社会の現代であっても、夕暮れになると心細くなるような山道を上る。うつそつと茂った樹々の間を20分ほど進むと夏目漱石の『草枕』のモデルともなった峠の茶屋へ。当時の茶屋はその看板を残すのみで、現在は場所を少し移して再建され、公園としても整備されている。茶屋の裏手となる南側には竹林、そのさらに奥には金峰山がそびえ、夕暮れ時の逆光の中にたたくさむ茶屋の様子は寂寥の言葉につきま。金峰山を南に眺めながら、さらに西へと山道を進む。しばらくすると、「暗」としたイメージのそれまでの道とは対照的に、蜜柑畑が広がりが有明の海が視界に入ってくる。蜜柑畑の道をしばらく行くと道は次第に下り坂、石垣の段々畑に実る黄色い蜜柑と民家の間を縫いながら西向きに斜面を下りていく。山を下りきったところ、漱石が宿泊した前田家別邸に到着する。竹やぶ近くの傾斜地に設けられた段差のある建物である。



『草枕』に「那古井の宿」として登場した前田家別邸

『草枕』の舞台 峠の茶屋―天水路

◆ここ「草枕」の舞台ともなった天水(てんすい)の地には「志保田家」として登場する前田家ゆかりの史跡があります。那古井の宿」として登場する別邸は、その離れの二室と浴場が保存され、当時に偲ぶことができます。最近では、その周囲に温泉施設や山荘なども整備され、有明の海と雲仙普賢岳、広い干拓地を望む絶好の眺望を楽しむながら過ごすことができます。峠の茶屋経由の「暗」と「明」のコントラストが天水の地を余計にまぶしく映すようです。市内の喧騒を離れ、このようなところで週末をゆつくり過ごせたら。そのような思いが頭をよぎります。「Kusankura 草枕」のキーワードで色々な情報がインターネットで検索できます。ぜひ、お試しください。

(工学部助教 緒方公二)



新聞

で見る 熊本大学

11/5 熊本日日新聞

創薬研究センター新設へ

熊本大学は、創薬研究センターの新設に向け、医薬品開発支援拠点に...

10/8 熊本日日新聞

ハンセン病講座 熊大でスタート

ハンセン病講座の開催について、熊本大学でスタート...



ハンセン病講座の開催について、熊本大学でスタート...

11/11 熊本日日新聞(夕刊)

日本再発見に「旅選選」

熊本大学が「旅選選」を主催し、日本再発見の取り組み...



熊大が国際研究協定...

熊大が国際研究協定

がん治療や環境汚染防止... 米、独の研究機関と締結

熊大が国際研究協定を締結し、がん治療や環境汚染防止の共同研究...

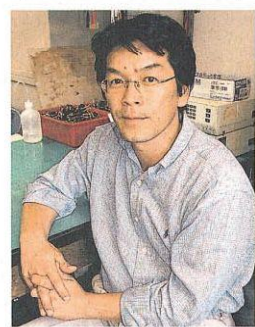
11/11 熊本日日新聞(夕刊)

10/31 熊本日日新聞

熱刺激で合成のタンパク質/筋肉の委縮抑え損傷軽減も

熱刺激で合成のタンパク質が、筋肉の委縮を抑え、損傷を軽減する...

熊本大学助教授 大石康晴氏



大石康晴氏による研究の概要と意義について...

フロントランナー

大石康晴氏に関するプロフィールと研究背景...

編集後記

熊本へ移り住んで4年半、しかしこの年でもいまだ「熊本弁」が身につくでもない。ただ、頻繁な出張のうちに、自分が熊本になじんできたこと、外で気がつくことがある。例えば、(1)「大津」と書かれているのを見て「おおつ」と読んでしまう。(2) 寿司・刺身につける醤油が「甘く」ないとイヤだ。(3) 納豆のタレが「甘く」ないとイヤだ。(4) ラーメンがさっぱりしていたり、ニンニクが効いていないと、物足りない。これらはまあ「害のない」なじみ方であるが、次のような「車の運転時の振舞い」には、なじまないよう心がけている。(5) 前方の信号が赤になる寸前でも突っ込んでしまう(私はしていません!)。(6) 右左折の際、ハンドルを切り始めるまでウィンカーを出さない(私はもっと早く出しています!)。(7) バスが客の乗降を終えて車線へ戻ってこようとしているのに譲らず、前へ突っ込んで行く(私はしていません!)。(8) 前方は詰まっているのに、側道などから出てこようとする車に譲らず、前へびったり詰めてしまう(私はしていません!)。年末年始、安全で優しい運転をなさったでしょうか? (編集委員 佐藤毅彦)

編集委員

- 佐藤毅彦 教育学部
- 緒方公一 工学部
- 桑和彦 発生医学研究センター
- 上野真也(委員長) 政策創造研究センター
- 事務局/総務課広報室
- 文責/熊大通信WG

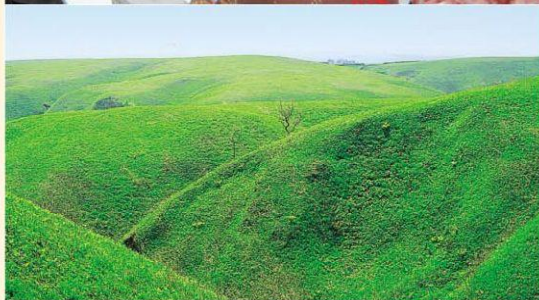
熊本大学公式ホームページ <http://www.kumamoto-u.ac.jp/>

皆様のご意見・ご感想をお寄せください。

熊本大学広報誌 熊大通信

2006年1月発行 編集/熊大通信WG 発行/熊本大学広報室 〒860-8555 熊本市黒髪2丁目39番1号 TEL:096-342-3119 FAX:096-342-3110 sos-koho@jimmu.kumamoto-u.ac.jp

自然と社会を ユタカにする



知を磨き、知を育てる熊本大学。

地域のなかで、

人の暮らしを、自然のあり様を、

豊かにしていきます。

知は社会に還元され、活かされるのです。

火になる人、 幹になる人へ

熊本大学

<http://www.kumamoto-u.ac.jp/>



古紙配合率100%の再生紙を使用しています。